

"学ぶ"に寄り添う  
コミュニケーションマガジン

社内報アワード  
受賞

NEWS LETTER

SEIGAKUIN NEWSLETTER

& Seig

No.  
285  
Mar.2023

対談

## Collaboration

- ① 聖学院中高 × 聖学院大学
- ② 聖学院みどり幼稚園 × 聖学院大学

特集

# 聖学院の各校連携

巻頭座談会

聖学院大学  
防災講座メンバーと  
教育デザイン開発センター  
SDGsユニット  
教員2名による  
トークセッション

各校・各園卒業生インタビュー

## 歩む人たち

聖学院みどり幼稚園・聖学院小学校卒業生 伊藤 万桜さん

関係団体の皆さんにインタビュー

## 支える人たち

株式会社 大場造園 大場 二郎さん



140th Anniversary of the  
Disciples' mission to Japan

## CONTENTS

特集

### 01\_ 聖学院の各校連携

聖学院大学防災講座メンバーと  
教育デザイン開発センターSDGsユニット教員2名による  
トークセッション

### 03\_ &Talk

対談

### 07\_ Collaboration

- ① 聖学院中高 × 聖学院大学
- ② 聖学院みどり幼稚園 × 聖学院大学
- ③ TOPICS

各校・各園卒業生インタビュー

### 12\_ 歩む人たち [伊藤 万桜さん]

関係団体の皆さんにインタビュー

### 13\_ 支える人たち [大場 二郎さん]

### 14\_ Seig NEWS

### 17\_ 2023年、学校法人聖学院は創立120周年

120年の轍を歩む

### 19\_ 聖学院歴史探訪

—聖学院の創設と発展(男子) 聖学院 下—  
[EPISODE #20]

## 聖学院ニュースレターアンケート

QRコードからあなたの声をきかせてください。  
アンケートに回答いただいた方の中から抽選で  
10名様に「聖学院オリジナル箸セット」をプレ  
ゼント!いただいたご意見は、編集の上、本誌  
にてご紹介させていただくことがあります。




- 有効回答期間  
2023年3月27日～2023年5月22日
- 当選発表  
当選者の発表は、賞品の発送をもって  
代えさせていただきます。



本アンケートに関するお問い合わせ  
聖学院広報センター Tel 03-3917-8530

編集/学校法人聖学院 広報センター  
デザイン/株式会社キュー・ジー  
発行日/2023年3月16日



# 聖学院の 各校連携

特集

今、幼小接続、中高一貫に加え、小中連携や高大連携が重要視されています。地域連携もますます浸透し、加えて組織のあり方としては学校法人、企業を問わず部門間連携という言葉をよく耳にするようになりました。しかし一言に連携と言っても、ただ単につながれば良い結果が生まれるとは限りません。一時的なもので終わってしまう例もあります。連携の有効活用が求められる中、連携とはそもそも何か、そこからどんな価値が生み出されていくのかを考えたいと思います。

# &Talk

## 特集 聖学院の各校連携

聖学院では、教職員から在学・在校生まで学校やキャンパスを越えて盛んに連携が行われています。時間や場所、様々な制約や課題を乗り越えて生まれるいくつもの連携には、原動力となる強い「想い」があるのではないのでしょうか？これまで様々な「連携」に関わってきた教職員・卒業生にその「想い」を尋ねました。





はやかわ たいすけ  
**早川 太脩**

聖学院中高理科教諭。東邦大学理学部化学科卒業後、進学塾で指導しながら聖学院中学校高等学校講師として勤務したのち現職。理科探究などの探究的な授業や、プロジェクト型の学年行事、高校GIC独自科目のProjectを担当。



たどころ ひ と こ  
**田所 陽登子**

聖学院大学人文学部欧米文化学科3年。聖学院小学校、女子聖学院中高を経て聖学院大学に入学。2022年3月に聖学院中学校で大学の先輩が実施した防災講座にボランティアとして協力。2022年11月には母校である女子聖学院中学校での防災講座を行った。



ひゅうが たがゆき  
**日向 貴之**

女子聖学院中高英語科教諭。教育デザイン開発センターSDGs教育ユニット長。国際基督教大学教養学部卒業。言語教育学を専攻し、学部研究でのテーマは英語学語用論。2020年より現職。高校2、3年生の授業、HR担任を担当。

聖学院みどり幼稚園で聖学院大学児童学科（4月より子ども教育学科）の実習を行った。聖学院中高と女子聖学院中高が記念祭で合同企画を行った。聖学院ではかねてから学院内で様々な連携が行われてきました。加えて近年、聖学院大学の学生による防災講座が駒込3校でそれぞれ開催され、上尾と駒込の距離を超えた連携が生まれています。また駒込では聖学院小学校、聖学院中高、女子聖学院中高がSDGs、英語、ICTにおいて一つのビジョンを共有する教育デザイン開発センターが設置されました。防災講座を行なっている聖学院大学在学中の田所陽登子さん（聖学院小学校・女子聖学院中高卒業生）と、教育デザイン開発センターSDGs・ESD教育デザインユニット（以下、SDGsユニット）の早川太脩先生（聖学院中高）と日向貴之先生（女子聖学院中高）にお集まりいただき、連携について様々な視点からお話しをうかがいました。

**卒業生から在校生へ  
連携により得られる気づき**

——女子聖学院中高で開催した防災講座の内容を教えてください。

田所 私たちが体験した東日本大震災の話と防災グッズの紹介を中心に、女子聖学院中高の生徒に防災の大切さを再認識してもらう講座です。私たちは大

学院小学校に通っていました。福島で震災にあった防災講座のメンバーもいます。福島と聖学院小学校の、小学生目線での震災体験を話すことで、女子聖学院中高の生徒たちに災害を自分ごととして捉えてもらえるのではないかと考えました。

防災講座に参加した生徒に書いてもらったアンケートに「自分にも関係あると気づいた」「防災バッグを準備しようと思う」などの意見があり、やって良かったと思いました。

日向 卒業生が新しい学びを持ち帰り、今の在校生に伝えてくれるのは、本当にうれしいです。

——防災の話は先生ではなく、大学生から聞く意義は何だと思えますか？

日向 新鮮さがあると思います。外部の方、しかも大学生という近い年代の方だと程良い緊張感を持って参加できます。またその分野における今のリアルが聞けるのは重要です。教員はすべてのことに関する専門家ではありません。災害や被災地、防災に関して興味関心を持ち、体験したものを持ってきてくれるというのは、教員では教えられない部分で、大きな意義があります。

早川 聖学院中高に限れば、プロジェクトやアクションに興味がある生徒は、発表することなど、アウトプットの力がどんどん伸びています。しかし根拠をしっかりと持つこと、そのためのインプットが足りない印象があります。実

際にアクションを起こしている年齢の近い大学生が来てくれると、インプットの大事さを実感できます。もう少ししたら自分も同じ立場になるという人たちの考えを目の当たりにするのは、とてもインパクトがあります。こういう機会がもっとあると良いと思っています。



**アクションでつながる  
駒込3校の連携**

——教育デザイン開発センターSDGsユニットについて教えてください。

早川 今の子どもたちは、SDGsのことを小学生の時から学びます。早くから知っている分、中学生、高校生になつて行動を起こせる生徒が多いかという、むしろSDGsという言葉に慣れすぎてアクションに至らないケースも多々あります。だからSDGsを知識だけで終わらせず、アクションまでつなげるのがSDGsユニットの目標です。さらには学内に止まらず学外でもSDGsに向けた働きかけができる人を育てることを目指しています。

日向 各校でそれぞれ独自に進めてきたSDGsの取り組みを、学院全体としてとりまとめ、一つの教育デザインにしていくというのがもう一つの目標です。各校をとりまとめると



2022年11月に行われた防災講座の様子。中学生にも身近な防災グッズを紹介する田所さんほか防災講座のメンバー。



防災講座、SDGsプロジェクト、それぞれの活動やその想いを語っていただきました。

組織が必要となり、SDGsユニットが生まれました。

— 具体的にはどういう取り組みをしていますか？

**日向** 生徒がSDGsを自分ごと化して社会貢献につなげるプロジェクトとしては、1年目の2021年度は防災エコプロジェクト、2年目の2022年度は環境エコプロジェクトという取り組みを行っています。

**早川** 防災エコプロジェクトは気候変動・災害に対し、高齢者や弱い立場の人も考慮にいられた「誰一人取り残さない防災」を軸として、課題解決に取り組む活動です。2022年3月には中高生が主体となって、聖学院小学校の児童も参加して「防災エコキャンプ」を開催しました。その中で備蓄食品の乾パンをおいしく食べる調理法や節水の仕方を教える「防災食チーム」、災害時の脱出の仕方をシミュレーションゲームで教える「災害脱出・情報チーム」などが企画を実施しました。

**田所** 私の妹が女子聖学院中高の高校2年生で、去年の防災エコプロジェクトに参加していました。授業の関係で私は参加できなかったのですが、「防災エコキャンプ」には聖学院大学から防災講座のメンバーも参加していました。

**日向** 環境エコプロジェクトは、CO<sub>2</sub>排出量データで分析した学校の現状をもとに生徒が環境への課題を抽出し、その課題解決のためのアクション

を起こしていく取り組みです。

— 男子と女子が連携することで生徒たちにどんな変化がありましたか？

**早川** 聖学院中高の生徒は、ものづくりやことづくりに興味があり積極性はある一方、全体を調整するのが苦手な傾向があります。時にはやりっぱなしといったばなしに見受けられることも。女子聖学院中高の生徒はその調整力がとても優れています。男女一緒にやることで聖学院中高の生徒は自分たちに足りない力が見えてきて、とても良い学びの機会になったと思います。

**日向** 女子聖学院中高の生徒にとっては調整することが自らの学びになっていましたし、また聖学院中高の生徒にパワーをもらった部分もあり、そういうところでも学びを得ていたと思います。

**早川** また積極的に参加できる生徒がいる反面、興味はあるけど自分から発言するのは苦手な生徒もいます。そういう生徒は引目を感じてプロジェクトから遠ざかってしまいがちです。1年目はそういう生徒のケアにも力を入れていました。そんな生徒が2年目の環境エコプロジェクトにも参加していて、しかも今度は自分が積極的に引張るようになっていました。そういう生徒を見ると成長を感じます。

— 一方で、聖学院は中高が男子と女子に分かれています。個別に教育を行うメリットは何ですか？

**日向** 男子と一緒にいる場合は、男子の仕事、女子の仕事のような役割の区別が出てきます。しかし女子校では全て女子生徒でやらなければいけないため、それぞれの得意なことで役割分担が決まっています。また共学において、女子が生徒会長になるケースは少ないと聞いたことがあります。そういう責任ある立場も必然的に女子が担います。これからの社会で、様々なことに参画していける自立した女性として成長できるのは女子校のメリットだと思います。



**早川** 男子の場合は、勉強に限らずやりたいことに集中しやすくなります。また、共学の場合、運動部は運動部で、文化部は文化部でグループになりがちです。しかし聖学院中高では運動部も文化部も関係なく共通の趣味の話で盛り上がっている風景をよく目にします。生徒同士に垣根がないのが男子校のいいところかなと思います。

### 連携の「壁」を越えると生まれるもの、見えるもの

— 連携がうまくいかなかった経験はありますか？

**田所** ちょっとしたトラブルがあったときに報告していなかったり、うまくいかないことは情報共有が足りないと

きに起こるよう感じます。私も含め、忙しいとつい伝え忘れることがあります。情報とアイデアの共有は大切だなと思います。

**日向** 昨年の防災エコプロジェクトのとき、目標やモチベーションを共有することが大事だと思っていました。防災食チームが12月の中間発表の時点で思うような進捗になっていなかったのです。女子のリーダーに聞いてみると「男子のメンバーが何を考えているかわからない、何も言ってくれない」と言っています。そこで私はそのリーダーに、まずは自分がやりたいことやチームの目標をメンバー一人ひとりに話してみることを勧めました。彼女は私が言った通り頑張った男子メンバーと話しました。そうした男子メンバーがやりたいことや自分が思っていることをいっばい話してくれるようになり、結果、主体的に動くチームに変わっていききました。やりたいことや参加した理由を共有すると良いチーム、良い連携になっていくと感じました。

**早川** 一緒に何かをするという点で、すり合わせを行っていくということも大切かもしれません。聖学院中高と女子聖学院中高は防災エコプロジェクトやパラスポーツ応援プロジェクトより前から記念祭で連携をしています。昨年度と一昨年度は新型コロナウイルス対策のため対面での開催ができず動画配信という形での開催でした。動画になるとやはり女子は個人の特定につながらないようセキュリティに気をつか

う必要があります。顔を出せないこともその一つです。その中で、生徒たちは何ができるか模索して連携を続けていました。一方に制限があるから連携は難しいと考えるのではなく、お互いを理解し合っただけで本来の目的を保てるかすり合わせていくことが必要だと感じました。

——なぜ近年連携が求められるようになってきたと思いますか？

**日向** 世の中の変化の速度が速くなっていると感じています。それに対して学校は、変化してはいるものの、企業や社会ほどの速さで変わり続けてはいません。そのような状況の中で、生徒を狭い学校の中に縛り付けないことが大切だと思っています。学校も企業や他大学、学院内など、あらゆる要素とつながって、生徒が学びを発見できるチャンスを増やしていく必要があるのではないかと思います。女子聖学院中高の中だけでも「新しいものをどんどん取り入れよう」という機運を感じます。

**田所** 小学生の頃を振り返ると、聖学院小学校はとても発展的な授業をやっていたと思います。中高でも生徒の学びを中心に考えた素晴らしい授業を行っていました。しかし、それぞれの良さはあるのに中学校に入ると小学校の学びがばたつと途切れ、別の学習が始まるという印象でした。今日、駒込の小中高が連携して一貫したコンセプトで教育をするというお話を聞いて、本当にとっても良い取

り組みだと思いました。連携が求められるようになった理由もそういうところにあるのかなと感じます。

活動の原動力、連携への「思い」

——みなさんのプロジェクトに対する想いを教えてください。

**田所** 私が防災講座にボランティアとして参加したきっかけは、福島出身の友だちとの何気ない会話でした。震災当時の様子を話したのですが、これだけ情報があふれているのにお互いの地域で起こったことを全然知りませんでした。知っているようなことほど意外と知らないと感じ、もっと多くの人に防災の大切さを改めて知ってほしいと思うようになりました。大きなことはできないかもしれませんが、人々の考えるきっかけになってくれたらうれしいです。それが活動に参加している原動力です。



**日向** もともと先生が知識をただ教えることからではなく、PBL(※)的なところからしか学べないものもあると感じていました。教育デザイン開発センターのプロジェクトに参加して、聖学院小学校も聖学院中高もSDGsにせよ英語教育にせよ取り入れたいと思うような、本当に素晴らしい取り組みをしていると知りました。最初は生徒に

プラスアルファの学びの機会を与えたいという思いだけで参加したのですが、今ではもう一歩進んだ考え方で、連携によってどれだけお互いが学び合えるかを目指すようになりました。また、僕個人としても学びの機会として、幅広い視点を持った教員として成長したいと思っています。

**早川** 教員というとなんでも知っている印象をもたれることがありますが、全くそんなことはありません。小学校、中学校、高校、大学と通ってそのまま教員になる人も多く、むしろ社会に触れたことがない人もいます。その中で生徒たちを教え、社会に出ていく準備をさせています。だからこそ教員も学び続ける必要があります。外部とつながって協力を得て、生徒と一緒に教員も成長していく。そういう意味でも連携はとても大事なことでだと思っています。

(取材日/2023年1月)

※PBL(Project Based Learning) 日本語では問題解決型学習「課題解決型学習」と訳される勉強法です。生徒が自ら問題を見つけ、さらにその問題を自ら解決する能力を身に付ける学習方法のことを指します。  
(出典: <https://www.epson.jp/products/bizpro-jector/ekokuban/knowhow/pbl.htm>)



昨年度に行われた防災エコキャンプの様子。防災食・エコクッキング、脱出シミュレーションゲームなど、小学生が防災に関心をよせられるコンテンツばかりでとても好評でした。

# Collaboration

聖学院の各校間で行われている連携には、  
継続しているにもかかわらず意外と知られていないものや、  
恒例化してしまい本来の意義が見えにくくなっているものがあります。  
主軸となる先生たちにお話をうかがい、個々の連携に今一度光をあて、  
それぞれのストーリーを改めて考えていきます。



あしざわ ひろこ  
芦澤 弘子

聖学院大学ボランティア活動支援センター ボランティアコーディネーター(専門職)。東京農業大学造園科学科卒業後、旅行会社、市町村のNPO支援センター勤務を経て、2012年度より現職。市民社会をつくるボランティアフォーラムTOKYO2023実行委員長を務めるなど、学内外でボランティアの輪を広げる活動に取り組んでいる。

いとう ゆたか  
伊藤 豊

聖学院中学校・高等学校 国語科教諭、テニス部顧問。1968年横浜市生まれ。立教大学文学部卒業。「体験学習の学びを教室に」をモットーに、学習者中心の授業研究と実践に取り組んでいる。2010年度よりタイ研修旅行を担当し、事前・事後学習プログラムの作成、引率、レポート集の発行などを行っている。校務とは別に、山岳民の無国籍の高校生を支援するプロジェクトに参加中。



## 聖学院中学校・高等学校 × 聖学院大学

聖学院中高には、タイ研修旅行というタイ北部の村に約2週間滞在して、生徒が現地の社会課題に取り組むプログラムがあります。任意参加でありながら定員枠を大きく超える申し込みがある大人気研修です。このプログラムを取りまとめている聖学院中高の伊藤豊先生と、聖学院大学ボランティア活動支援センターの芦澤弘子さん、2013年のタイ研修旅行で出会います。課題解決とボランティア活動、この掛け合わせが、その後両校に様々な連携を生み出しました。



## 誰かのために本気になれる その気持ちが連携の原動力

——連携のきっかけとなった2013年のタイ研修旅行について教えてください。

芦澤 当時、聖学院中高のタイ研修旅行がとても素晴らしいと聖学院大学で話題になりました。大学に取り入れられることがあるのではないかと教職員が視察に行くことになり、私もその一人として派遣されました。

伊藤 芦澤さんが最終日、振り返りのワークショップをやってくださったんですね。

芦澤 本当は見学させていただきだけの予定でした。でも実際に行ってみるとじつとしていられず、私にもできることがあるのではないかと「振り返り」を提案しました。研修旅行の感想や、何を学んだのか、学んだことをどう実生活、学校生活に生かしていきたいかということを生徒に言語化してもらいました。

伊藤 タイ研修旅行は生徒たちの自由度が大きい分、学びもいろいろな方向にいきます。そのままだと拡散するばかりで何も得られないのではと危惧し始めていたところだったので、振り返りのワークショップを見て「こういう形があるのか」と感銘を受けました。生徒たちの内側から湧いてくる気持ちやディスカッションで出てきた言葉をちゃんと拾って進んでいけるので、このやり方は良いと思いました。

芦澤 私の方も、生徒の主体性に任せつつも、ここぞというときは大切なことを生徒に

問いかける伊藤先生の絶妙なバランスを目の当たりにして、ぜひいろいろな学ばせてほしいと思いました。

——聖学院大学と聖学院中高の連携にはどのようなものがありますか？

芦澤 このタイ研修旅行がきっかけで、聖学院高校の生徒会長に「ボランティア活動を校内で広げたいけど、どうしたら良いのかわからない」と相談を受けました。帰国後、何度かメールのやりとりを重ね、北区の社会福祉協議会が紹介するボランティア活動が高校生には安心安全であることや、まずは生徒会の範囲内で実施し、スモールステップで広げていった方がよいことなどをアドバイスしました。この件で、生徒会顧問の先生ともやりとりさせていただき、より一層大学と中高が活動のコミュニケーションを取るようになりました。

伊藤 聖学院大学の釜石でのボランティア活動に中高の生徒も同行させてもらっています。逆に聖学院大学のボランティア活動をしている学生に中高に来てもらって、3月11日に震災について考えるというイベントも行いました。聖学院中高には、L.L.T.（\*）という授業があります。自分について考え、それを他者に広げ、最後は社会に関心を持つというコンセプトの中学の授業です。社会がまだよくわからない中学1年生に社会を感じてもらうため、聖学院大学の学生に協力してもらい、ボランティア活動の話をしてもらいました。彼らの体験が中学1年生には、社会と自

分とのつながりをイメージするきっかけになったようで、生徒から具体的な質問がたくさん出ました。

芦澤 これまで様々な連携を続けてこられたのは、タイ研修旅行で伊藤先生の社会課題に真っ直ぐに向き合う姿勢や生徒への情熱に触れられたからだと思います。タイで生徒のことをたくさん聞いた記憶があり、先生の大きな愛を感じました。私にとつて連携が一番大切なのは、そこに本気の思いがあるかどうか、そういう方と手を取り合うことができるかどうかです。

伊藤 釜石に同行した時、聖学院大学の学生が東京からのバスの中でずっと、防災の伝え方について話し合っていました。また自分たちのイベントで、現地で被災したお寺の住職に震災の体験談を話してもらった企画があり、その依頼に行った際も、学生は住職へのご負担を思いやって涙ながらにお願いしていました。そんな姿を見てるとシーンときまします。ぜひうちの生徒に彼らの姿を見せたい、会わせたいと強く思いました。

——今後の展望を教えてください。

伊藤 今度は聖学院大学の大学生対象のタイ研修旅行をやりたいです。大学生だからできることがきっとあります。

芦澤 私は聖学院中高の生徒に大学に来てもらって、大学生相手に授業をしてほしいです。中高生から刺激を受けることがたくさんあると思います。

（取材日／2023年2月）

\*L.L.T.=Learn Live Together

（右）新型コロナウイルスの影響で中止されていたタイ研修旅行。3年ぶりの開催です。料理プロジェクトの生徒たちが中心になって、全員で手打ちの天ぷらうどんを作りました。一日がかりの料理でした。（左）聖学院大学の復興支援ボランティアスタディツアーで行った釜石での活動の様子。写真は伊藤豊先生も下見に同行した2019年のものです。学生たちは、子どもたちにも防災を啓蒙するため防災戦隊マホルンジャーというヒーローショーを企画しました。



## 聖学院みどり幼稚園 × 聖学院大学

女子聖学院短期大学（以下短大）児童教育学科（児童学科の前身）の実習園として設立された聖学院みどり幼稚園（以下みどり幼稚園）。当時は大学の授業の一部をみどり幼稚園の一室で行っていたそうです。成り立ちからして関わりの深い両者の連携について、聖学院大学児童学科の相川徳孝先生と、みどり幼稚園の国府田郁絵先生にお話をうかがいました。

大学とみどり幼稚園が保育観を共有するからこそ、連携が深くなる

—みどり幼稚園と聖学院大学児童学科にはどのような連携がありますか？

相川 短大時代から大学に移行した当初はみどり幼稚園の副園長が講師を兼務している関係で、幼稚園で授業が行われていました。その後、短大から4年制になり大学で授業を行うようになってからは、実習で学生がみどり幼稚園に行っています。また昔から続いている連携は、ボランティア活動やアルバイトです。ボランティア活動の例としてはお泊り保育のお手伝いなどがあります。

国府田 あと夕涼み会や夏祭りなども学生の方に手伝ってもらっています。今年度はみどりフェスタという、幼稚園の保護者が物品を用意して販売するバザーを開催し、多くの学生ボランティアの方に来てもらいました。

アルバイトは幼稚園の保育が終わった後、14時～18時の預かり保育に関わってもらっています。学生の方には、園の先生の補助という形で子どもと遊んだりおやつ準備をしたり掃除をしてもらったりしています。

相川 学生が聖学院の幼稚園・小学校に1～2日見学に行き、幼児や児童のありのままの姿を見る「学校インターンシップ（基礎）」という科目があります。この科目においてもみどり幼稚園とは連携しています。

国府田 今年度の「学校インターンシップ（基礎）」では、実習の最後に学生の質問に答える時間を作りました。学生が園の子ども

あいかわ のりたか  
相川 徳孝

聖学院大学人文学部児童学科特任教授。  
彰栄幼稚園、武蔵野相愛幼稚園、社会福祉法人雲柱社黎明保育園、聖学院アトランタ国際学校の保育現場のあと、児童学科教授を経て現職。聖学院みどり幼稚園では保育主任として3年間、大学と兼任。社会福祉法人雲柱社保育ブロックのリーダー研修を担当。キリスト教保育連盟養成機関委員長。春日都市子育て支援審議会会長。



（右）聖学院みどり幼稚園。木々が色づく自然豊かな園庭で落ち葉の上を子どもたちが元気に駆け回っています。

（左）児童学科の学生がボランティアとして参加する「みどりフェスタ」。ここにも学びがあります。



たちを見て感じたことを話したり、私たちが学生の質問に回答することでお互いの理解が深まったと感じます。また、みどり幼稚園が大切にしている遊びを中心とした保育や子どもを中心とした考え方は、相川先生が大学で教えていることでもあります。学生にとってはこの質疑応答が授業で習ったことを再認識する機会にもなったのではないのでしょうか。

**相川** 子どもを中心に考えるとは、例えば子どもが何かをしてしまったとき、子どもにはそうしなければいけない理由が必ずあり、それをきちんと考え見極めてから対応するという態度のことです。もちろん1日で身につくことではありません。しかし、数週間にわたって行う実習の場合、終盤では「○○ちゃんはこのように通じるかな」と考えるようになります。私は実習日誌の中にその片鱗を見ることがあります。実習中、学生は目の前のことで手一杯になります。それでも子どもを理解しよう、子どもの活動には必ず意味があるはずだと思いながら対応していくと、子どもの活動を「○○ちゃんこうなんだよね」と代弁できるようにもなります。そこから子どもとの関係性が構築されますし、子どもを理解できたという経験は学生を成長させます。

その時は分からなくても、ちゃんと大学に持って帰れば、解説してくれる先生がいます。もう一度来たいと言われれば園も受け入れます。そういう距離感の環境があるということはとても貴重なことだと思います。

— 今後の展望を教えてください。

**相川** オープンキャンパスに来た受験生に、敷地には幼稚園があつて連携していることをもっとアピールしても良いと思います。敷地内に幼稚園が併設されている大学はそうはありません。

**国府田** 大学の先生がふらっと園に来て、子どもたちの遊びや生活をより知ってもらえと良いと思います。また、児童の先生に限らず、例えば植物に詳しい先生が「この花はこういう特徴があるんだよ」とか、みどり幼稚園の環境についてお話しただけると、ゆくゆくはそれが子どもたちの気つきや豊かさ、経験の厚みにつながってくると思います。

**相川** ここ（聖学院大学1号館1cafe）にキッズスペースを作つて、下のお子さんを連れて来ているお母さんがちょっとくつろいでお迎えを待てるようにするとか。

**国府田** 9時に送つて11時半までの間、大学の施設でくつろげますよね。

**相川** 学科だけではなく大学として、地域の子育て家庭に対して、もっと幅広い支援を考へても良いのかもしれない。

**国府田** いろいろできることがありますね。

（取材日／2023年2月）

こ う だ い く え  
**国府田 郁絵**

聖学院みどり幼稚園主幹。2001年3月に聖学院大学を卒業後、聖学院みどり幼稚園に勤務し2022年4月より主幹。保育者や親である大人が、子どもを真ん中に考えながらその育ちを支えていけるよう、日々の生活を大切にしたい保育を目指しています。



TOPICS 「みどり劇場」

バザーが盛大だった頃、児童学科の児童文化研究会の学生が企画運営する「みどり劇場」という劇や人形劇を上演するコーナーがありました。演目から子どもたちの誘導まで、学生が自分たちで考へて対応していました。学生にとって、子どもの実態や子どもの興味関心をしっかり学べる良い機会だったと同時に、園児にとってもいつもと違う新鮮さがあり、とても有意義なボランティアでした。

2023年4月から児童学科は子ども教育学科へ

社会の変化に伴い、慣れ親しんだ「児童」という語が大学を選ぶ高校生にとって馴染みにくいものとなりました。一人の子どもの人格に向き合い、言葉にならない子どもの思いを多角的に理解しようとする児童学 (child studies) の学問姿勢は、今日も色あせることはありません。そこで、学科が基盤とする児童学 (child studies) の原点に立ち返り、私たちの教育課程と教育・研究の実態を変えることのないよう「子ども教育」学科に変更いたします。これまで同様、多様な子どもと子育て家族に臨み、子どもたちと共に持続可能な社会を生み出す人を育てる学科です。



TOPICS 「クリスマスツリー点火式」

▶ 幼稚園×小学校×男女中高

駒込キャンパス三校一園クリスマスツリー点火式

～共に祝う喜び～

クリスマスの出来事を通して、イエス様に会ってほしい。これは、キリスト教教育を担う教職員一人ひとりの祈りです。毎年11月に行われる「クリスマスツリー点火式」もそんなキリスト教行事の一つ。学校法人聖学院は2023年に創立120周年を迎えますが、イエス・キリストの誕生はさらに2000年前にさかのぼります。長い歴史の中で連続と守られてきたのがクリスマス（礼拝）であり、ツリーへの点火を通して光の象徴であるイエス様の誕生を祝います。駒込キャンパスでは聖学院幼稚園・聖学院小学校・女子聖学院中高・聖学院中高が、さいたま上尾キャンパスではみどり幼稚園と聖学院大学が連携して実施していますが、コロナの影響によってしばらく対面で行うことができませんでした。しかしながら2022年は駒込キャンパスでも3校1園で共に祝うことができました。“共にいる”ことの中で、私たちは隣にいる人を思い、賛美を合わせる喜びを体験します。将来は駒込キャンパス、さいたま上尾キャンパスが連携して、地域の方も招いて共にお祝いすることができればと願っています。

インタビュー：院長・キリスト教センター所長 山口 博（2023年2月）



TOPICS 「PTA聖書研究」

▶ 小学校×中高

聖学院小学校PTA聖書研究会

～家庭に届けたい聖書の言葉～

児童だけでなく、家庭にも聖書の「みことば」を届けたいという思いを持って行われているのがPTA聖書研究会です。「研究会」という名前がつけられていますが、聖書を読み、賛美をささげる礼拝です。コロナによって中断した年もありましたが、現在は月に一度、幼小合わせて毎回200名近く（オンラインを含む）保護者の参加があります。連携という観点では、2022年度は1年間を通して聖学院中高校長の伊藤大輔先生にメッセージを語っていただきました。クリスチャン人口が1%に満たない日本において、一人でも多くの方にイエス様と会ってほしいという先人たちの熱い思いが「聖書研究会」を支えてきました。これからも大切にしていきたい営みの一つです。

インタビュー：聖学院小学校教頭・聖学院幼稚園園長 田村一秋（2023年2月）



TOPICS 「5年生と年長さんの交流会」

▶ 幼稚園×小学校

幼稚園年長さんと小学5年生との交流会

～自分の喜びから相手の喜びへ～

聖学院小学校と聖学院幼稚園は同じ敷地内にありながら、普段は別々の校舎で過ごしています。そんな児童、園児の交流の機会が「幼稚園年長さんと小学5年生の交流会」。ここでは、5年生が園児を楽しませるという役割を担って準備を進め、年に2回の交流会が持たれます。「園児に対して自分は何ができるのか？」を問いながら、自分の立場で考えるのではなく相手の喜びを探っていきます。モグラたたきやクイズといった企画を準備しながら、ときには思い通りにいかないことも。それでも、この交流を通して園児への温かい思いが育まれます。年長さんにとっては、とても大きなお兄さんお姉さんですが、優しさに触れた経験を携えて小学校に入学することができます。

インタビュー：聖学院小学校教頭・聖学院幼稚園園長 田村一秋（2023年2月）



# 歩む人たち

「卒業生を尋ねて」

17

伊藤 万桜 さん  
いと う ま お

聖学院みどり幼稚園 卒園  
聖学院小学校 卒業

## PROFILE

プロヴァイオリニスト  
東京音楽大学卒業、同大学院及び仏・独  
で研鑽。  
仏のカザルス音楽祭・独・伊・露の音楽祭  
出演。  
東京フィルハーモニー交響楽団と共演  
2021年から毎年2月、東京オペラシテ  
ィでリサイタルを開催。



デビューアルバム「"Flessible" (フレキシブル)」(オールアンフィニ・レーベル, 2021)

## ヴァイオリンとともに歩む人生を選んだ卒業生

2月に東京オペラシティでリサイタル、8月には、ヴァイオリン、ピアノ、サクソという珍しいトリオの軽井沢でのコンサートを予定しているプロのヴァイオリニスト、伊藤万桜さんは聖学院みどり幼稚園の卒園生で、聖学院小学校の卒業生です。

幼少時、上尾市に家族で在住していた伊藤さんがみどり幼稚園に入園したのは、ご両親が聖学院大学の公開講座を受講したことがきっかけでした。大学を訪れてはじめて、大学に隣接する自然豊かな幼稚園の存在を知り、キリスト教に基づく幼児教育のあり方に共感したのだと言います。幼稚園に通うことで、さらに聖学院の教育に対して期待を高め、聖学院小学校へ進学します。

中でも鮮明に思い浮かぶのは友だちや先生たちの笑顔。今日も取材前に会ってきた聖学院小学校の保健室の養護教諭、飯泉奈那先生は、実は小学校の同級生で今も変わらず仲良しな友だちです。

伊藤さんはこれまでに、みどり幼稚園と聖学院幼稚園で何度か演奏会をされています。卒園してからもつながりがある先生からのお願いで実現した演奏会です。伊藤さんがみどり幼稚園に通っていたときに、女子聖学院の卒業生でギタリストの村治佳織さんの演奏会があり、とても感動されたそう。その村治さんが演奏した会場と同じ場所で開催できることを光栄に思ったと言います。新型コロナウイルス感染症パンデミックは、子どもたちが生の音楽に触れる機会を奪ってきてしまいましたが、子どもたちには、もっと、生の楽器の振動を体感してもらいたいということが伊藤さんの願いだそうです。

※PUUTALO:フィンランド語で「木の家」の意味。現在の園庭の砂場の横に建っていた子どもが遊ぶための丸太小屋。



聖学院各校の  
植栽を手掛ける  
緑のスペシャリストさん



# 支える 人たち

聖学院を外から支えてくださっている人たちに  
聖学院への想いをうかがってみました。

No.  
07

株式会社大場造園  
おおば じろう  
大場 二郎 さん

株式会社大場造園代表取締役社長。街路樹剪定士の資格を持ち、明治神宮外苑 絵画館前のイチヨウ並木剪定の指導役や街路樹剪定士の指導者育成の講師も務める。木の医者である樹木医の資格も持つ緑のスペシャリスト。

自然を受け入れ、自然の中で遊び、学ぶ  
私たちもその教育のお手伝いがしたいと思っています

春には花が咲き、夏には木陰を作る校舎の樹木。学校が毎年変わらぬ景観を保っているのはその木々を管理している人たちがいるからです。聖学院の場合、株式会社大場造園がその多くを手掛けています。大場造園代表取締役社長の大場二郎さんに聖学院とその植栽についてうかがいました。

「株式会社大場造園は創業69年の造園会社です。個人の庭から商業施設、学校まで様々な規模で緑の環境をつくっています。つくるだけではなくメンテナンスをし、景観保全と樹木の健康管理を行っています。学校の場合、枯れ枝の落下による事故を未然に防ぐことに一番気をつけています。1997年、聖学院中高の建て替えの時に、戸田建設株式会社の協力会社として関わったのが聖学院との最初の仕事でした。その後、聖学院大学のチャペル建設の植栽、聖学院小学校の建て替えの植栽、女子聖学院中高の学習園造園にも携わらせていただきました。

聖学院は自然にあるものに対して抑え込まない印象があります。例えば、木に被害をもたらす虫が発生した場合、聖学院は「これも自然」と受け入れ

た上で「あまり被害が広がらないうちになんとかしよう」とする大らかさがあります。そうした考え方は保護者にも受け入れられているように思います。それが都心の中にあってもこれだけの緑を確保できている理由だと思います。もちろん自然には危険が伴います。しかし、危ないからと言って遠ざけるのではなく、そのことも子どもたちに教え、本当に危ないときはちゃんと先生が守るといふスタンスをとっています。生きていくということを教えている気がします。私たちはそうした教育の中で子どもたちが安全に過ごせるお手伝いをしていると思っています。」

聖学院中高の校舎建て替えの時、大場さんは学校側から今ある樹木を残したいという想いを伝えられました。また大場さんが関わる前に木々の移植の下準備をしてくれていた会社があったそうです。だから大場さんは「木々を残そうとする人たちに応えたい、枯らしてはいけない」という思いで植え替えにあたったと言います。その気持ちは形となり、大場造園が植えた樹木は各校に根付き、今も児童、生徒、学生たちを見守っています。

まだまだあります!

# Seig NEWS

学生も生徒も教員も職員も  
次のステップへと  
日々新しい試みをしています。

## 聖学院大学総合研究所



### 韓国との交流 東国大学と「研究交流協定」を締結



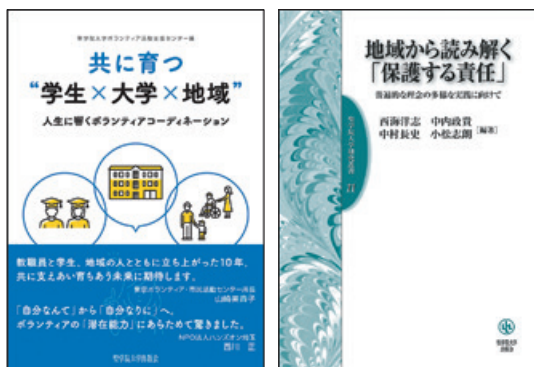
2月1日(水)、韓国の東国大学移住多文化統合研究所と聖学院大学総合研究所の「研究交流協定」締結式がオンラインで開催されました。関連分野に関する共同研究の遂行、学術大会や会議などへの参加を通じた交流、学術情報の交換などを通じた相互協力体制の構築と協力分野は多岐にわたります。情報交換をはじめ人的交流を行い、将来的には共同研究も進められます。両研究所の交流と発展に寄与する記念すべき式典となりました。

## 聖学院大学出版会



### まもなく発刊! 新刊のご紹介

聖学院大学出版会から新刊をご紹介します。西海洋志ほか編著『地域から読み解く「保護する責任」——普遍的な理念の多様な実践に向けて』は、国際政治における「保護する責任」を描き出します。聖学院大学ボランティア活動支援センター編『共に育つ“学生×大学×地域”——人生に響くボランティアコーディネーション』は、ボランティア活動を通して成長する学生と地域、大学との関係をセンターの支援のあり方とともに考えます。



## 聖学院大学

### SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



### 「日本一暮らしやすい埼玉県」を目指して 本学SSCが埼玉県SDGs官民連携 プラットフォームへ入会

1月、サステナビリティ推進センター (SSC) は「ワンチームで埼玉県版SDGsを推進する」という目的に賛同し、埼玉県SDGs官民連携プラットフォームに入会しました。本学におけるSDGsやサステナビリティへの取り組みなどの情報発信を行いながら、本プラットフォーム会員である多様な企業・団体等との交流を深め、連携し、「日本一暮らしやすい埼玉県」を実現することを共に目指します。



SSCは地域の自治体などと協力した活動を行っています。写真は自治体の研修でカードゲーム「SDGs de 地方創生」を行っている様子。

※学校法人聖学院はグローバル・コンパクトに署名・加入し、SDGsを目指した活動を行っています。  
※SDGs…2030年までの実現をめざし掲げられた、17の目標と169のターゲットからなる「持続可能な開発目標」

## 女子聖学院中学校・高等学校



### 女子聖学院の伝統、英語科、 中学「レシテーションコンテスト」開催

2月13日(月)女子聖学院中学校で「レシテーションコンテスト」が実施されました。女子聖中学のレシテーションコンテストは、用意された原稿を単に暗誦するだけでなく、文章の内容を理解し、ジェスチャーなどの自身のオリジナルの表現も加え、「自分のことば」として伝える力が評価されます。題目は「I Have a Dream」「Paper Cranes」「A Law of Life」「Give me Liberty or Give me Death」など、平和や自由、平等、正義がテーマとなっています。高校では7月に英語スピーチコンテストが開催されます。



## 聖学院中学校・高等学校



### 地方創生アイデアコンテストにおいて 『東北経済産業局 局長賞』を受賞！

聖学院高校1年生の黒羽遥太さんが、「地方創生★政策アイデアコンテスト2022」において、『東北経済産業局 局長賞』を受賞しました。作品タイトルは、『ふるさと納税と農業体験で地域創生』です。高1年次に毎年実施している社会課題発見・解決体験型学習を目的とした宿泊行事「ソーシャルデザインキャンプ」と、今年度より始まった新カリキュラム「情報1」を中心とした歴史総合・数学1・総合探究の横断型授業を経て成長した生徒たちが、アウトプットの機会としてこのコンテストに取り組みました。聖学院は高1と高2で50を超える個人やチームが出場し、1次予選も10チーム以上が通過しました。黒羽さん、本当におめでとうございます！



黒羽遥太さん(右)と  
授業担当の山本周先生(左)

## 聖学院小学校



### 仲間と協力しながら 壁を乗り越える「冬の学校」

聖学院小学校では“人を愛する心”を育てる教育を大切にしています。人を愛する心の実践には、仲間と協力することや壁を乗り越える力が必要です。「冬の学校(対象学年4年生)」は校内とは異なる大自然の中で、仲間と共に壁を乗り越える体験学習です。1月25日(水)から1月27日(金)までの2泊3日、長野県飯山市にて普段なじみのないクロスカントリースキーを体験します。さらに夜のワークショップでは雪の木島平から常夏のバリ島の学校とオンラインで結び、一緒に同じ世界のテーマSDGsについて考えることができました。身近な仲間と、そして世界の仲間と共に考え乗り越えていく、貴重な体験をした3日間でした。



クロスカントリースキーに挑戦



バリ島のお友達とオンラインで交流



雪のテーブルで温かい豚汁をいただきます



## 聖学院みどり幼稚園



### お餅つき会

1月21日(土)「お餅つき会」を開催しました。前日にもち米を洗うことから始まり、薪を割り、かまどで火をおこし、湯を沸かし、もち米を蒸す、という一連の流れも、この行事の楽しみのひとつです。子どもたちも、かまどにくべる木を、何日もかけて園庭から拾い集めました。保護者の方にも、力仕事から火の番まで、色々とお手伝いいただきました。それらの過程を身近に感じながら行うことのできるみどり幼稚園のお餅つきは、子どもたちにとっても貴重なうれしい時間です。各家庭1名という人数の制限付きでしたが、ついたお餅をお家の方と一緒に、のんびりお庭で食べながら、時間を忘れて穏やかに過ごしました。



## 聖学院幼稚園



### 豆まきあそび

子どもたちは「よく遊ぶ」ことを通して、自分の気持ちやお友達のことを体験的に理解していきます。2月3日(金)におこなった「豆まきあそび」もそのひとつ。「よく遊ぶ」の土台となるたくさんの「楽しい」を大切にしています。子どもたちは、自分の心の中にあって追い出したい「おこりんぼ鬼・なきむし鬼・やさいきらい鬼」をイメージしながら鬼のお面をつくります。鬼役になった年長さんは、投げた豆が届かない年少さんに鬼ポーズをとりながらも豆が自分に当たるように近づいてあげたりします。最後は年少さんも鬼になって、年長さんと追いかっこ。園庭中に笑顔溢れる時となりました。



## 学校法人 聖学院



リニューアル後のトップページ



## 法人Webサイトをリニューアル

～学ぶ人・社会に貢献するデジタルコミュニケーションのプラットフォームを目指して～

1月16日(月)、法人の公式Webサイトを全面リニューアルしました。120周年を目前にデザイン、サイト全体の構成を一新。ユーザビリティの向上に努めました。また、新機能やコンテンツの設置を進め内容の充実化を図っています。学校法人聖学院の特色や一貫校としての魅力を発信し、幅広いステークホルダーに向けて新たな学びや体験をお届けすることを目指します。なお、新サイトはQRコードからご確認いただけます。ぜひご高覧ください。

## 編集後記

今年度最後の広報誌をお届けします。今号では聖学院各校同士の連携に迫りました。特に、巻頭特集の座談会に加え、対談も実施したことが注目していただきたいポイントです。レイアウトを従来之物から変更し、本号ではより人物に注視した誌面作りを行いました。また、毎号皆様にご回答いただいているアンケート結果をふまえ、1年ぶりに「読者の声」も掲載しました。今回はチラシでのご紹介となっておりますので、併せてご覧ください。なお、毎度のことですが、作成に当たりご協力いただいた皆様には、この場を借りて改めてお礼を申し上げます。今後も皆様に聖学院教育についてお伝えし、楽しんでいただけるように精進していく所存です。これからも広報誌をよろしく願いたします。(N.K)

りますので、併せてご覧ください。なお、毎度のことですが、作成に当たりご協力いただいた皆様には、この場を借りて改めてお礼を申し上げます。今後も皆様に聖学院教育についてお伝えし、楽しんでいただけるように精進していく所存です。これから広報誌をよろしく願いたします。(N.K)

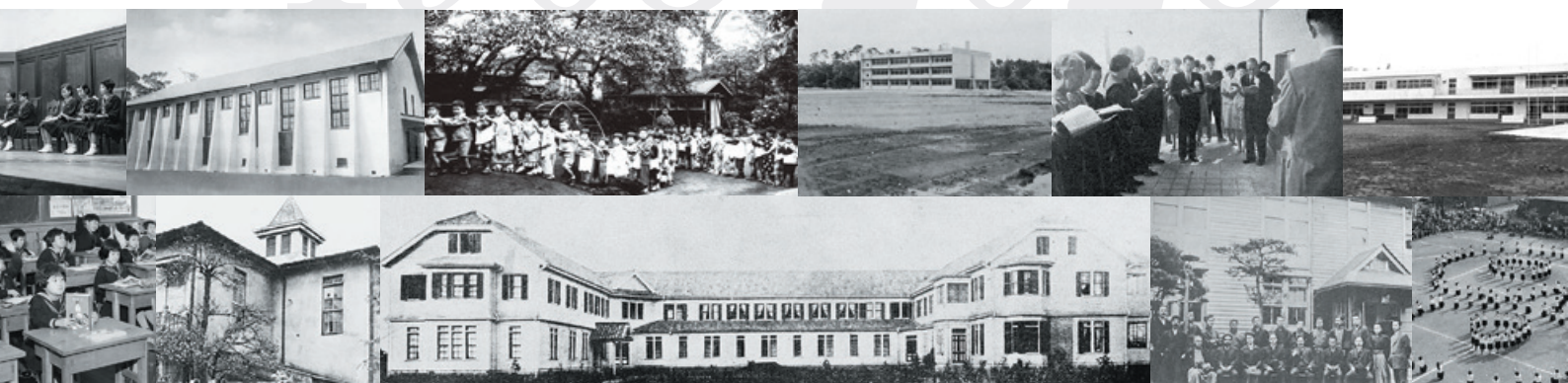


|| 140th Anniversary of the  
Disciples' mission to Japan ||

## 2023年、学校法人聖学院は創立120周年

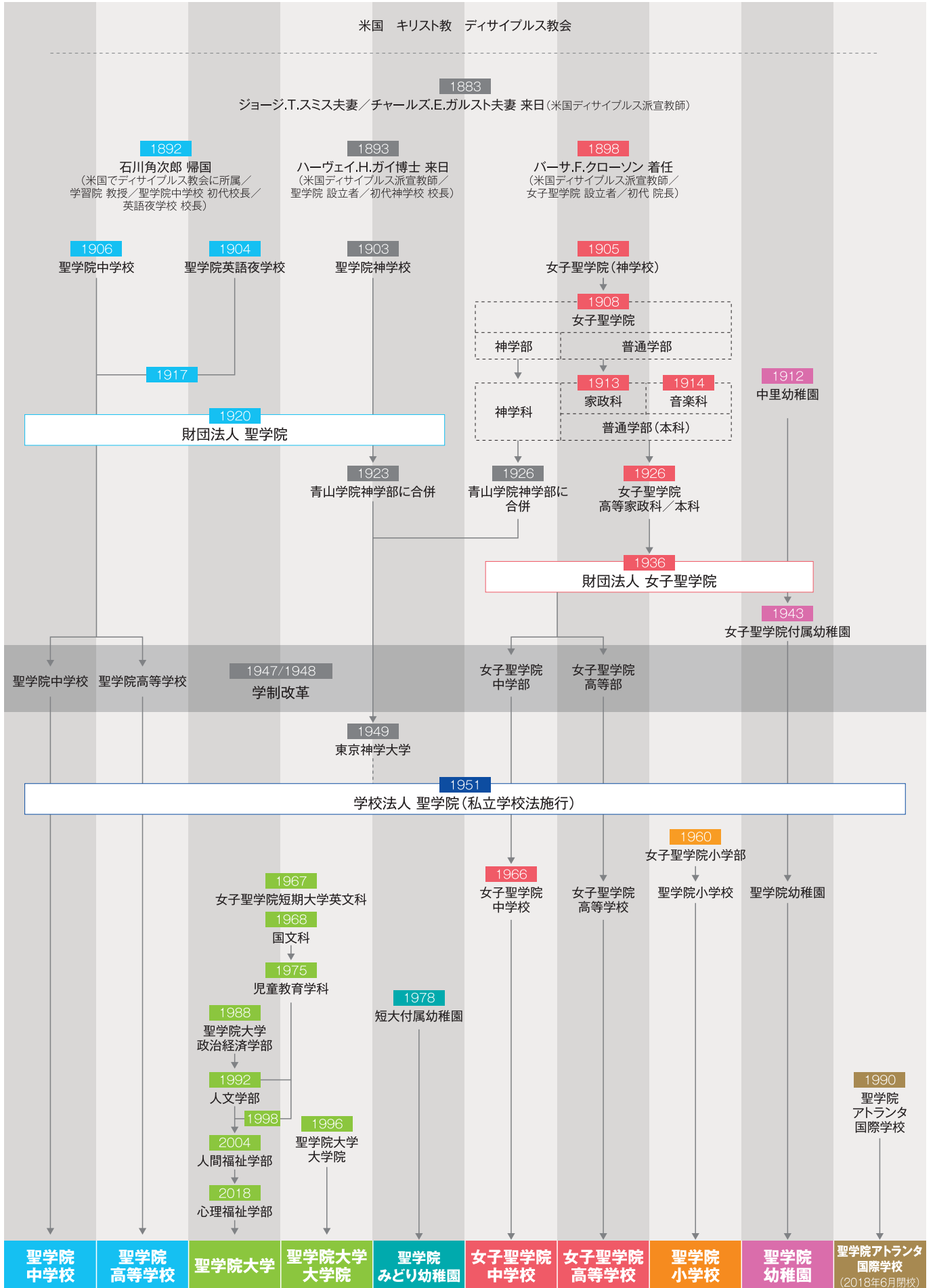
1903年、現在の文京区本郷の地に誕生した神学校から  
聖学院の歩みは始まりました  
“神を仰ぎ 人に仕う”  
この建学の精神を土台に  
真理を探究すること、神と人間を知ること、社会に貢献することを目指し  
「変えることのできるもの」と  
「変えることのできないもの」を問いながら  
聖学院はこれからも歩み続けます

# 1903-2023



# 聖学院の歴史

## History of Seigakuin University & Schools



# 聖学院歴史探訪

## #20 聖学院教育の歴史

- 聖学院の創設と発展  
(男子)聖学院 下 -



石川角次郎\*1

このガイ博士（前号参照）を助けて聖学院の基礎を据えたのが石川角次郎です。石川角次郎は16歳の頃入信し、政治・法律の分野を学ぶことを志して、東京大学予備門に進みました。しかし途中中心の大変化を生じ、「人を治むるの学問」ではなく、「心を治むるの学問」「人を救うべき道」を志して伝道者になることを決意いたします。そしてアメリカにわたり、キリスト教と英文学を勉強して帰ってきます。帰国後、学習院の教授をしていた時にガイ博士の懇請を受けて、学習院を辞職して聖学院神学校で教え、1906年聖学院中学校が設立された際、初代校長として奉仕することになります。石川角次郎は聖学院についてこう言っています。「我等は君が学園を『聖学院』と名付けた。その意義は、聖なる学院ではなく、聖学の院である。聖学とは聖人の学である。聖人の学とは、聖人の教えを学ぶばかりでなく、学んで聖人となるのである。されば本校の理想は聖人を養成することである。」ここで言われている「聖人」が「キリスト者」を意味することは言うまでもなく、神と人の前に独特の価値を有して奉仕する者たちの出現を石川角次郎は願っていました。聖学院が他のキリスト教学校に比べても、実に多くの牧師・伝道者を輩出しているのは、石川角次郎のこの祈りの賜物であります。

（次号に続く）

出典：聖学院キリスト教センター編「聖学院の精神と歴史」聖学院ゼネラル・サービス、2006年版（出典より一部変更）

\*1イラスト制作：株式会社ジャパンシステムアート

## 学校法人 聖学院

理事長／清水 正之 院長／山口 博  
〒114-8574 東京都北区中里3-12-2 Tel 03-3917-8351  
ホームページ <https://www.seig.ac.jp/> E-mail [pr\\_h@seigakuin-univ.ac.jp](mailto:pr_h@seigakuin-univ.ac.jp)

### ■さいたま上尾キャンパス

#### 聖学院大学

・政治経済学部／政治経済学科  
・人文学部／欧米文化学科 日本文化学科 児童学科（2023年4月より子ども教育学科）  
・心理福祉学部／心理福祉学科  
学長／清水 正之 創立／1988年 〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1-1 Tel 048-781-0925

#### 聖学院大学大学院

政治政策学研究科／文化総合学研究科／心理福祉学研究科  
創立／1996年 〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1-1 Tel 048-780-1801

#### 聖学院みどり幼稚園

園長／赤田 直樹 創立／1978年  
〒331-0045 埼玉県さいたま市西区内野本郷820 Tel 048-622-3864

### ■駒込キャンパス

#### 聖学院 中学校 高等学校

校長／伊藤 大輔 創立／1906年  
〒114-8502 東京都北区中里3-12-1 Tel 03-3917-1121

#### 女子聖学院 中学校 高等学校

校長／安藤 守 創立／1905年  
〒114-8574 東京都北区中里3-12-2 Tel 03-3917-2277

#### 聖学院小学校

校長／佐藤 慎 創立／1960年  
〒114-8574 東京都北区中里3-13-1 Tel 03-3917-1555

#### 聖学院幼稚園

園長／田村 一秋 創立／1912年  
〒114-8574 東京都北区中里3-13-2 Tel 03-3917-2725

### ●インターネットでの寄付のお申し込みについて

クレジットカード（VISA、MasterCard）をお持ちの方は、お申し込みから入金までご自宅等で、PC、スマートフォン、携帯電話からインターネットによるお手続きができます。下記URL、QRコードにアクセス下さい。

<https://www.seig.ac.jp/asf/>



### 住所変更・広報誌の発送停止・お問い合わせ

<https://www.seig.ac.jp/asf/contact/>

学校法人聖学院ASF事務局

Tel 03-3917-8530（月～金 9:00～17:30）

